

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2003 年 7 月～9 月)

2003 年 11 月 4 日
ボン研究連絡センター 萩尾 生

1. 発刊に際して

10 月 1 日付けで日本学術振興会が特殊法人から独立行政法人に移行したのに
伴い、今回から、当該センターの四半期報告書の構成を一新しました。

主な変更点は、1) 従来「活動報告」と「学術動向報告」の 2 種類あった報告
書を統合し、『ぼんぼん時計』と名づけたこと、2) 今回の報告書から通し番号
を付して、後日の参照を容易にすること、の 2 点にあります。

今後、内容・構成ともに、順次改善していきたい所存ですので、皆様の忌憚な
きご意見やご指摘を頂戴できればと願っております。

なお、この報告書とは別に、当該センターの研修員が中心となって、ドイツの
若手研究者の「ナマの声」を随時お届けしていく予定ですので、そちらもご期待
ください。

2. ドイツ連邦レベルでの学術動向

◎2004 年度学術・研究予算 6 %増の見込み

ドイツの 2004 年度学術・研究予算は、前年度比 6 %増の見込みである。2004
年度予算額は 96 億ユーロと概算され、今年度予算額よりも 5 億 4,500 万ユーロ
の増加となる。そこには、全日制学校開設予算の 10 億ユーロ (2004 年度割当
額) と、連邦教育促進法(BAföG)による貸付奨学金返済分 4 億 3,500 万ユーロが
含まれている。

全日制学校プログラムの枠内において、連邦政府は州政府に対して 4 年間に渡り総額 40 億ユーロを拠出する。本年においてはその最初の割当額 3 億ユーロ、来年には 10 億ユーロが州政府に支払われる。

ドイツ研究協会(DFG)やマックスプランク研究協会(MPG)といった大規模研究機関の予算は 2004 年予算案において 3 % 増となる。ブルマーン教育研究大臣はこれを「国際的に認知されたドイツの研究基盤が今後も最高レベルで活動できるように」と説明している。

それに対して、来年のプロジェクト振興費は 1 億 5,500 万ユーロ減の 220 万 3,000 ユーロとなる。プロジェクト振興費は、とりわけ国立ゲノム研究ネットワークによるバイオ医学研究と、社会・人文科学分野の研究に重点が置かれている。もっとも連邦教育研究省 (BMBF) によれば、プロジェクト振興費は、1998 年から (2004 年まで算入して) 31.9% 増加しているとのことである。もし 2004 年の予算案が実現すれば、教育・研究枠の総額は 1998 年より 32.8% 上昇することになる。最も大幅なアップはコンピューターやネットを利用した教育部門であり、1998 年の 48,000 ユーロから 2017% 増の 227 万ユーロである。

参考 : dpa, Nr. 30/2003, 21 Jul, 2003

◎新プログラム「未来教育 (Zukunft Bildung)」に 3,200 万ユーロ

連邦政府と州政府の共同教育改革を促進するために、連邦政府の活動を束ねる新政策「Zukunft Bildung (未来教育)」に対して、2004 年に初年度として 3,200 万ユーロが拠出される。その中には、教育の標準化、国内教育広報、語学・読み書き能力および数学・自然科学的能力の促進、移民教育援助が含まれている。

同じく 3,200 万ユーロが充てられるのは、新しく協定が結ばれる「高等教育機関協約(Pakt für die Hochschulen)」である。これについてはブルマーン教育研究大臣が今年中に発表予定であるが、その目的は大学教育条件の向上と大学中退者数を抑えることにある。

連邦教育促進法(BAföG)による貸付奨学金予算については、2003 年の 8 億 5,000 万ユーロから 8 億 9,000 万ユーロの増額が見込まれている。ブルマーン大臣によれば、連邦教育促進法の改定後、奨学生数は 9 万人以上、増加している。職業上のキャリアアップ用継続教育部門も同様で、8,800 万ユーロの見積もりは 2003 年と比較してほぼ変わっていない。学生・研究者交換の予算は、「ドイツの高等教育機関の国際化をさらに推進するため」(ブルマーン大臣)、6,060 万ユーロから 7,500 万ユーロに増額となっている。

同大臣はまた、新連邦州の教育・資格・研究を連携させるため、「InnoRegio」や「地域経済成長核 (Regionale Wachstumskerne)」などの振興プログラムがコンセプト面・予算面ともに強化されるべきであると語っている。このため、2004 年においては総額 9800 万ユーロ (2003 年 680 億ユーロ) が拠出されることになっている。

参考 : dpa, Nr. 30/2003, 21 Jul, 2003

◎ドイツにおける外国人学生勧誘

6 月 17 日付で連邦教育研究省 (BMBF) から発表されたデータによれば、減少傾向にあったドイツの外国人学生数が、過去 2 年において約 3 万人 (25%増) 増加し、143,000 人となった (内訳 : 総合大学 115,000 人、専門大学 23,600 人、芸術・音楽大学 4,400 人)。これに加えて、両親は外国人だが大学入学資格をドイツの学校で取得した学生 (Bildungsinländer) の数は 63,400 人であった。

ブルーマン大臣は、ドイツ学術交流会 (DAAD)、フンボルト財団 (AvH)、ドイツ大学長会議 (HRK) と今後も協力し、ドイツ留学への勧誘・広報を引き続き支援することを発表した。ドイツの大学生総数 187 万人のうち 8 %が外国籍を有している (1998 年は 6 %以下) が、出生率低下によるドイツ人学生の減少を見越して、2008 年までにこの値を 10%にまで引き上げることを目標としている。また、同大臣は将来、ドイツ人学生の 20%を最低 1 学期間、外国留学させる意向だ。

ドイツ政府は、AvH と共同で「ソフィア・コヴァレフスカヤ賞 (Sofja-Kovalevskaja-Preis)」を改めて募集する意向である。ノーベル賞よりも高額なこの外国人研究者用プログラムは、当初の計画では、本年末で終了することになっていた。

一方、不安材料は外国人学生の住環境である。学生互助会 (DSW) によると、学生寮に外国人学生 21,000 人分の部屋が不足している。学生寮建設にドイツ復興銀行の貸付金を利用する、という連邦政府からのオファーを、州政府が活用していないとも言われている。ドイツ全国にある学生寮の 22 万室うち 30%が外国人学生によって利用されており、大規模な大学都市ではその割合は 50~60%に及ぶ。

ブルーマン大臣は、大学が外国人に門戸を開くことより、大学教員も国際色豊かになることを歓迎している。新しいジュニア・プロフェッサー制度によるポストの 15%を外国人が占めているが、大学職員においてはわずか 5 %である。国際的なバチラーおよびマスター資格が今後導入されていけば、ドイツ留学の魅力が増すと思われる。

ブルーマン大臣は来年、ドイツの大学国際化のための措置に 1,400 万ユーロを投入する予定で、そのうち 300 万ユーロを「ソフィア・コヴァレフスカヤ賞」、600 万ユーロをマーケティング、また 400~500 万ユーロを外国におけるドイツの大学カリキュラムの促進に充てる。

ドイツ学術交流会 (DAAD) のテオドーア・ベルヒェム会長は、連邦政府および州政府に、外国人学生に安定性を与える「移民法」の早急な可決を要請している。同氏は外国人学生増加 (ドイツは世界第 3 位の留学先) を歓迎し、将来的には外国人学生を質的な基準で選別すべきであると述べたが、フンボルト財団ヴォルフガング・フリーヴァルト会長は「最も優秀な学生が来なかったという証

拠があるわけではない」と反論している。なお、ドイツ学長会議理事長クラウス・ラントフリートは「ブルマーン教育相は大学に対して州政府より多くの尽力をした」と語っている。

参考：dpa, Nr. 30/2003, 21 Jul, 2003
AvH, Pressmitteilung Nr. 18/2003

◎ドイツ研究協会（DFG）、研究ランキングを発表

ドイツ研究協会（DFG）は、大学研究実態に関し、『研究ランキング 2003：機関－地域－ネットワーク Förder-Ranking 2003. Institutionen-Regionen-Netzwerke』と称する調査結果を発表した。この調査は、DFGの他、ドイツ学術交流会（DAAD）、フンボルト財団（AvH）、その他調査のデータをまとめたもので、ドイツの研究状況を明らかにするものである。

以下が、調査の概要である。

【全般的傾向】 DFGの研究助成金が最も多く流れ込んでいる地域は、ベルリンとミュンヘンである。1999 年～2001 年の 3 年間に於いて、ベルリンに位置する大学および関係施設は 3 億 700 万ユーロを、ミュンヘンは 2 億 4300 万ユーロを獲得した。1999 年～2000 年に於いて、ドイツの高等教育機関の研究者は 54 億ユーロの外部資金を獲得しているが、そのうち DFG からの研究助成金の割合は 34%と、最大の割合を占める。DFGの研究助成金を獲得した高等教育機関は、相対的に外部資金獲得割合が高い。

【<トップ 20>の大学】 DFGの研究助成金獲得上位 20 大学は、全ての大学が DFG から獲得した助成金総額の 56%を占める。残りの 44%は、計 122 の大学に分散して配分された。これら上位 20 大学の教授一人あたり獲得金額は、第四グループ（1～20 を第一グループ、21～40 位を第二グループ、41～60 位を第三グループ、61～78 位を第四グループとしている）の大学教授一人あたり金額の約 6 倍にのぼる。この傾向は、外部資金獲得全般についても確認される。すなわち、DFGの助成金獲得トップ 20 大学の教授一人が獲得した各種外部資金の総額は、第四グループの教授の約 3 倍となっている。

【学科別外部資金獲得状況】 学科別の外部資金獲得状況については、教授一人あたり、1999 年～2000 年の 2 年間で、平均 22 万ユーロとなっている。DFG の分類基準による 16 学科を見ると、歴史・芸術学の 55,000 ユーロから、工学・エンジニアリングの 71 万ユーロまで幅広い。

【選考委員／評価委員】 今回のスタディのために初めて、DFGの選考委員／評価委員の分布について統計評価が行われた。1999 年～2001 年に委員の任に就いた約 1 万人が被調査母体になっている。彼らのうち、ドイツ国内に研究活動の場がある者については、その約 15%が大学外の施設に勤務している。その人数が最も多いのはマックスプランク研究協会（MPG）（3.6%）であり、ヘルムホルツ協会、ライプニッツ研究協会が続く。DFGの助成金獲得トップ 20 大

学は、上述の第四グループに比較して平均約 3 倍の選考委員／評価委員を出している。

【フンボルト財団客員研究員】興味深いのは、DFG からの助成金獲得額が多い大学ほど、フンボルト財団客員研究員をより多く擁している、という正の相関性である。いわゆるトップ 20 大学では、第四グループに属する大学と比べて、教授一人あたりのフンボルト研究員の数約 10 倍にのぼる。それほど顕著ではないが、DAAD 奨学生の数との正の相関性も確認される。

【研究論文】ドイツの高等教育機関の研究論文の 40%が、トップ 20 大学研究者によって発表されており、34%がラインキング 21～40 位の大学研究者による。上位 20 大学では、教授一人につき、第四グループ大学教授の約 2 倍の論文発表が行われている。なお、トップ 10 大学では世界平均より 16%も高い頻度で論文が国際的に引用されており、11～20 位についても世界平均を 5%上回っている。

【その他】過去の DFG ランキング調査に比較すると、結果に大きな相違はない。換言すれば、質の高い「学術研究拠点」は定着していると言える。そのなかで、従前に比してランクアップが顕著だった大学は、ヴェルツブルク大学、テュービンゲン大学、エアランゲン・ニュルンベルク大学である。

参考：Forschung & Lehre, 8/2003, pp. 419-420.

www.dfg.de/ranking/index.html

DFG, Förder-Ranking 2003. Institutionen-Regionen-Netzwerke, Bonn, 2003

◎ドイツ研究協会（DFG）モスクワ連絡事務所開設

すでに 2002 年 9 月の『学術月報』において事前報告したとおり、2003 年 7 月 1 日、ドイツ研究協会（DFG）は、モスクワに海外連絡事務所を開設した。同協会としては、北京、ワシントンに次いで 3 番目の海外事務所となる。

ドイツとロシアの学術交流は、旧東独時代の遺産を引き継いでいる部分もあるが、とりわけ 1995 年に DFG とロシア基礎研究財団（RFFI）が学術交流に関する覚書を締結して以来、ますます盛んになってきている。この覚書に基づいて、独露間のシンポジウム、共同研究、研究者交流が実施されているが、2002 年には 500 名以上の研究者が支援を受けている。

DFG モスクワ連絡事務所の主たる任務は、以下のとおりである。

- 1) ロシアにおける、研究者、研究機関、研究支援機関の窓口
 - 2) ロシア関係機関との協力関係の強化・活性化
 - 3) DFG の諸事業に関して研究協力の可能性についての助言
 - 4) 協力関係を支援する企画の準備と開催
 - 5) とくに若手研究者の養成に関する相互連絡と協力
 - 6) DFG にとって重要と思われるロシアの科学政策の展開を分析・評価
- なお、初代事務所長には、スラヴ語文学専攻の Dr. Doris Schenik が就任

した。

参考：『学術月報』2002 年 9 月号

DFG, *Pressemitteilung* Nr. 30, 2003

3. ボン研究連絡センターの活動

◎来訪&訪問

【7 月】

- 7 月 2 日 (水) 萩尾事務官、ドイツ研究協会 (D F G) 年次総会出席 (於ヴェルツブルク) (～3 日)。
- 7 月 4 日 (金) 萩尾事務官、我妻研修員、ドイツ日本研究学会年次総会 (於ヴィッテンベルク) において、本会の国際交流事業を紹介 (～6 日)。
- 7 月 9 日 (水) 田中センター長、マックスプランク研究所・国際交流課長・Dr. B. Neizert 及び同・日本担当・Dr. B. Spielmann と協議。
- 7 月 13 日 (金) 田中センター長、国際天文学会出席 (於シドニー) (～23 日)。
- 7 月 16 日 (水) ドイツ連邦政府教育研究省 (B M B F) ・研修員・宮田緑氏、来訪[対応：萩尾]。
- 7 月 25 日 (金) ドイツ連邦政府教育研究省 (B M B F) 国際交流センター・Dr. Nicole Zingsheim 氏、熊本大学・文学部・講師・Dr. Anne Gellert 氏、来訪[対応：萩尾]。
- 我妻研修員、ロンドン研究連絡センター主催シンポジウム出席 (於シェフィールド[英国]、～28 日)。
- 7 月 26 日 (土) 田中センター長、国立天文台等宇宙関係三機関法人化検討委員会出席のため、一時帰国 (～8 月 2 日)。

【8 月】

8 月 1 日 (金) マーブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・講師・Dr. Ingrid Fritsch 氏、ボン大学・講師・Dr. Andreas Marx 氏、来訪[対応：萩尾、Ganter]。

Ganter 係員、我妻研修員、フンボルト財団のフェオドア・リューネンプログラム同窓生・新規採用者への情報提供会出席。

8 月 7 日 (木) 萩尾事務官、フンボルト財団との協議。フンボルト側対応者は、選考第一課長 Dr. Thomas Hesse、選考第三課長 Dr. Johannes Belz、海外支援第三課長 Dr. Klaus Manderla。

8 月 8 日 (金) 萩尾事務官、ドイツ学術交流会 (DAAD) との協議。DAAD 側対応者は、アジア・オーストラリア・ニュージーランド・オセアニア・北アフリカ・近東課長 Dr. Irene Jansen、同係長 Dr. Ursula Toyka-Fuong。

8 月 11 日 (月) Ms. Julia Bach、当該センターにて 3 週間のインターンシップ開始 (～29 日) [対応：萩尾、Ganter、我妻]。

8 月 12 日 (火) ドイツ連邦政府教育研究省 (BMBF) 国際交流センター・Dr. Nicole Zingsheim、来訪[対応：萩尾、Ganter]。

8 月 13 日 (木) 「第 9 回全ドイツ日本学術振興会事業経験者の会・日独学術シンポジウム」について、同窓会幹部と打合せ。マーブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・講師・Dr. Ingrid Fritsch 氏、ボン大学・講師・Dr. Andreas Marx 氏、来訪[対応：田中、萩尾、Ganter、我妻]。

同窓会・元会長・Prof. Dr. Czarnetzki に対する謝恩会開催 (於ボン)。

8 月 19 日 (火) ケルン大学・民族学研究所・助手・Dr. Christian Brumann、来訪[対応：萩尾、我妻]。

8 月 25 日 (月) 田中センター長、Joint European and National Astronomical Meeting (於ブタペスト) 出席 (～30 日)。

【9 月】

- 9 月 1 日 (月) 当該センター” JSPS Abend” 《学振の夕べ》開催 (於ボン)。
- 9 月 4 日 (木) 萩尾事務官、我妻研修員、ボン大学・日本学研究科・助手・Ms. Marie-Luise Legeland を訪問し、ドイツの学術情報他をインタビュー。
- 9 月 6 日 (土) 田中センター長、国立天文台等法人化検討会出席のため、一時帰国 (～10 日)。
- 9 月 8 日 (月) ルクセンブルク国立研究基金 (FNR) ・事務局長・Mr. Raymond Bausch 来訪[対応：萩尾、Ganter]。
- 9 月 9 日 (火) 萩尾事務官、ドイツ研究協会 (DFG) のに参加。本会事業概要のレクチャー及び共同ディスカッション。
- 9 月 11 日 (木) ドイツ研究協会 (DFG) ・研究振興専門部・Mr. Michael Schuster 来訪[対応：萩尾、Ganter]。
- 9 月 22 日 (月) ドイツ連邦政府教育研究省 (BMBF) 国際交流センター・Dr. Nicole Zingsheim、同・研修員・宮田緑氏、来訪[対応：萩尾、Ganter、我妻]。
- 9 月 24 日 (水) 田中センター長、ALMA 会議 (於ワシントン) 出席 (～26 日)。
- 9 月 27 日 (金) 田中センター長、国立天文台等法人化検討会出席のため、一時帰国 (～10 月 4 日)。

◎JSPS Abend 《学振の夕べ》

2003 年 9 月 1 日 (月)、ボン市郊外の Bad-Godesberg に位置する〈La Redoute〉において、当該センターが JSPS Abend 《学振の夕べ》を主催した。〈La Redoute〉とは、かつての選帝侯の舞踏館である。この催しは、JSPS ゴマーフェストとも呼ばれる。日ごろお世話になっている関係機関 (省庁、高等教育機関、研究機関、研究支援機関、文化団体等) 関係者のうち、ボン近郊に在住・在勤の方々を招待して、当該センターの過去 1 年間の活動を総括するとともに、今後の展望を提供し、出席者相互の親睦を深めることを目的としている。



◎プロモーション（広報）活動

2003 年 7 月から 9 月にかけて、いくつかのプロモーション活動を実施したが、9 月 9 日にドイツ研究協会（DFG）の招待により、DFG 内部の役職員を対象とした本会事業説明は、大学に赴いて若手研究者に事業を紹介するものとは性質を異にした。

第一に、この事業説明は、DFG の役職員を対象としていた。約 650 名の職員を抱える同機関は、事業の圧倒的多数がドイツ国内向けであり、同機関内部においても、国際学術交流に通暁しているスタッフは少数である。『学術月報』2002 年 9 月号にて報告したように、今後戦略的な中長期的事業展開を求められている DFG としては、国際学術交流を促進する上で、対応機関の経験を参考にしたい、という意向があったと思われる。

第二に、この事業説明会は DFG にとって初めての試みだったというが、日本とインドが選ばれたが、この選択は失敗だったと考える。日本、中国、韓国ならまだしも、日本とインドでは、対独関係において共通の案件が少なく、議論がかみ合わなかったからである。

本会も DFG も従前からのボトム・アップ型支援のみならず、戦略的かつ機動的なトップ・ダウン型支援の導入が求められており、萩尾と DFG 役職員との間では、主として、これら双方の支援の拮抗をめぐって、私見の交換が行われた。

参考までに、以下に当日のプログラムを掲げる。



1. Ländernachmittag in der DFG

Dienstag, 9. September 2003, Saal 1

Indien und Japan

Einführung

14:00 Einführung (Michael Meier)

Interkulturelle Herausforderungen:

... *Indien* (Hannelore Bossmann, DAAD, 5 Jahre New Delhi)

... *Japan* (Gernot Gad, 3 Jahre Tokyo)

Forschungszusammenarbeit aus Sicht der DFG

- 14:30 - Exemplarische Kooperationsprojekte und Forschungseinrichtungen
Indien und Japan (N.N.)
- IZ-Programme (Hesse, Both, Gad)
- BMZ-Programm (Marx-Lenzen, Gad)

Partner Perspectives

- 15:00 Japan (Sho Hagio, JSPS Liaison Office Bonn)
India (A. Chakraborty, Indian Embassy Berlin)
A Young Indian Scientist in Germany (Smriti Trikha, Universität Karlsruhe)
- 15:30 Q&A

In Focus: Promoting Young Researchers Internationally

- 16:00 Demographic Differences and Challenges
International Research Training Groups (Priya Bondre-Beil)
- 16:30 Coffee Break

“Bollywood” Cinema

17:00 Monsoon Wedding

Indien 2001 - **Regie:** Mira Nair - **FSK:** o.A. - **Länge:** 116 min.
(voraussichtlich Originalfassung, wenn verfügbar mit deutschen Untertiteln)

Eine Familie am Rande des Nervenzusammenbruchs: Lalit und Pimmi Verda bereiten die Hochzeit ihrer Tochter Ria vor. ... Zum Fest treffen nicht nur verschiedenste Menschen, Generationen und ihre Schicksale aufeinander, sondern auch die zwei Welten Indiens - die traditionelle und die moderne, Kultur und Kult.



◎インターンの受入

8 月 11 日から 3 週間、外国語上級職業専門学校に通うユリア・バッハ(Julia Bach)さんを、インターンとして受け入れた。彼女には、日本学術振興会 OB 会員の名簿データ入力・整理や、9 月 1 日の JSPS Abend 出欠回答のデータ入力・整理をお願いしたほか、電話の応対と郵便物の仕分けを補助してもらった。

その背景などについては、別途『ぼん藝春秋』第 1 号にて報告済みなので、そちらを参照していただきたい。

◎その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ”forschen-in-japan.de”の拡充作業
- ・ ドイツ語版ニューズレター(ルンド・シュライベン)等の作成・配布
- ・ 各種情報収集提供業務
- ・ 日本学術振興会事業の広報(資料出展、新聞広告掲載ほか)

4. 今後の予定

- ・ 10 月 6 日(月) ノルトライン・ヴェストファーレン州・研究省大臣・Helmut Krebs 来訪。
- ・ 10 月 12 日(日) 日本学術振興会・国際研究協力課長・古川佑子氏ほか、来訪(～15 日)。
- ・ 10 月 16 日(水) ヘルムホーツ協会年次総会出席(於ハンブルク)。
- ・ 10 月 17 日(木) 日本学術振興会海外特別研究員聴き取り(於ハンブルク)。
- ・ 10 月 22 日(水) 萩尾事務官、一時帰国(～11 月 3 日)。
- ・ 11 月 6 日(木) 「第 9 回全ドイツ日本学術振興会事業経験者の会・日独学術シンポジウム」について、同窓会幹部と打合せ。
- ・ 11 月 21 日(金) 同窓会主催イベント「会員が会員を招待」に出席(～22 日)(於マールブルク)。

5. 後記

小生が当該センターに着任してから 2 年が過ぎた。この間における当該センターの活動は、どのように総括されるだろうか。

最初の 4 か月間は、現地生活と業務への適応、そして何よりもドイツ語の習得で精一杯の状態だった。業務に関しては、有能なローカル・スタッフと、当時の研修生でドイツ語に堪能な関根（旧姓・樋口）直子さんの力強い支援を受けて、従来からの日常業務をこなすことができた。また、田中センター長と国際情報課ならびに庶務課（当時）の皆さんの暖かい励ましは、心の支えだった。もっとも、ドイツの学術動向報告については、小生のドイツ語能力不足ゆえに、しばらくの間、従前の事務官に比べて質量ともに縮減したと言わざるをえない。

こうした中で小生が新たな活路として見出したのが、本会諸事業を中心とする広報活動であった。過去においても、関係官庁や大学の国際交流担当部署に出向いて事業説明を行ったことはあるようだが、現実には、そこから研究者や学生へ情報が効果的に提供されたとは思えない。そこで、同窓会やその他の人脈を利用して、研究者や学生（事務職員も同席）に対して直接プレゼンテーションを開始した。これが以外に好評で、昨今では、講演依頼がぼつぼつ舞い込んでくるようになった。

広報活動の成果が、例えば本会諸事業への申請者の増加といったように、具体的に現れるには、まだ時間を要すると思われる。しかし、日本学術振興会のドイツにおける存在感が少し増したのではないかと自負している。その根拠の 1 つは、当該センター来訪者に占めるドイツ人の割合の増加である。また、嬉しいことに、当該センターでインターンシップをやりたい、というドイツ人学生が現れた。

広報活動を通して人脈が広がり、それによって、二、三の機関については、ウェブサイトやメディアに掲載されない内部資料の入手が可能となった。

また、当該センターで研修している方々については、本人の資質を考慮して、いくつかの課題を与えた。例えば前年度の宮元研修員に対しては、ボッフム大学で東北大学のプレゼンテーションを行う機会を与えた。今年度の我妻研修員に対しては、ドイツ国内のドイツ人／日本人若手研究者へのインタビューを複数回実施してもらう。その初回報告は、『ぼん藝春秋』と称して配信を開始した。

さらにまた、今年度より、より学術性・専門性を高めた若手研究者によるコロキウムを開催することになった。当該センターは、従来より同窓会との共催により日独学術シンポジウムを年 1 回開催してきた。これを開催する意義は、同窓会員相互の連帯感高揚などの面で、十分あると考えるが、それだけでは不十分と判断したわけである。

以上、過去の報告書に書いたことを含め、総括をくどくどと叙述した理由の 1 つは、海外研究連絡センターへの派遣を、「気楽な海外生活」だといまだに誤解している方々の発言が耳に入ってくるからである。当地における生活は、日本における生活と質こそ異なれ、日本学術振興会を中心とする業務と密接に結びついたものである。さらに言うなれば、それは、単なる「語学遊学」でも、「学位取得」のための便法でも、決してない。